

令和7年5月30日

中標津町議会議長 後 藤 一 男 様

中標津町議会議員 阿 部 沙 希

研 修 報 告 書

以下の視察について、次のとおり報告します。

- 1 視察名 文教厚生常任委員会道外視察
- 2 視察先 香川県宇多津町 南部すくすくスクエア
- 3 視察日 令和7年5月13日（火）
- 4 視察事項 南部すくすくスクエアの取組・放課後児童支援・ファミリーサポートセンターについて
- 5 成 果（具体的に）

香川県宇多津町は人口約 18,600 人程、総面積 8.10 ㎢で香川県で一番小さな町です。

子育て支援施設が5ヵ所、保育所が2ヵ所、認定こども園が5ヵ所、幼稚園が1ヵ所、放課後児童育成クラブが4ヵ所、放課後子ども教室が2ヵ所あります。

また、小学校が2校、中学校が1校、短大が1校あり、子ども人口が増え、南部地域に多世代交流施設をつくることになりました。この交流施設名は4世代を表す4色をモチーフとした「スクエア」という意味です。

子ども中心に地域の人が集まれるように「たまりの場」をコンセプトにした拠点施設をつくるため、町長が積極的に活動的に動いて補助金を探したと説明があり、町長も職員と一緒に事業を進めており、行政が一体化し職員の苦労が実ってつくられた施設でした。

施設の前には町長が提案した広々とした人工芝があり、遊具がなくても裸足で走り回れる場所で、子どもたちが寝転がりのびのび



（上）施設内の図書室 （下）ホール

過ごせる大人気の場所です。

建設費用は用地費を除いて約3億5千万円、設置までは3年かかり、地方創生拠点整備交付金、起債補正予算債と県の補正予算も含めて建設されています。

①地域子育て支援拠点事業（すくすくひろば）

②放課後児童健全育成事業（すくすくクラブ）

③カフェ事業（すくすくカフェ）④貸館事業

①～③の事業をNPO法人へ委託し、運営にあたり町職員1名が館長（元校長先生）をつとめています。

この町の放課後児童クラブ最大の魅力は、小学6年生までが利用でき、ランドセルを背負ったまま利用が可能であることです。当町は小学3年生までの登録児童のみしかランドセルを背負ったまま児童館へ行くことができないので、高学年でも一人で留守番をさせるには不安がある核家族、様々な事情を抱えている世帯に寄り添う取り組みとして、ぜひ当町にも取り入れるべきシステムであると考えます。

また、障がいのある子どもの受入体制について質問をしたところ、療育手帳A・Bの障がいにも制限はせず、療育手帳のある加配が必要な子どもたちも受け入れは可能であるとのことでした。当町にも是非、未就学までは障がいの有無にとらわれずに保育が行われているので、就学後も希望する家庭には児童館の利用を制限せずに受け入れられる制度、施設の拡充をすべきであると考えます。

宇多津町で取り組んでいることの中から、できることを我が町に取り入れていけるように、子どもたちの未来につながる温かな活動を行っていきます。



宇多津町の皆さんと

- 2 視察先 愛媛県四国中央市 子ども若者発達支援センター「palette」
- 3 視察日 令和7年5月13日（火）
- 4 視察事項 子ども若者発達支援センターについて
- 5 成果（具体的に）

【四国中央市の歴史と palette の誕生】

四国中央市の人口は約8万人で、昭和51年から情緒障がい児通園ホームが開設され、心身障がい児通園ホームや肢体不自由児教室などをつくる取り組みを、昭和の時代から取り組んでいた市です。

市役所発達支援室のスタッフや市民からの強い要望により市政を動かし、平成 29 年に「四国中央市子ども若者発達支援センター（愛称パレット）」が新築開所されました。

また、「四国中央市障がいのある人もない人も共に安心して暮らせる愛ある社会を目指す条例」が市議会の全会一致で可決され制定されています。（以下、「愛ある条例」と記載します）愛ある条例を制定された四国中央市は、多くの発達に思い悩む人々を救ってきた砦となっています。

【palette での魅力的な受け入れ】

パレットでは、子ども若者総合相談として、0 歳～39 歳までを対象とした幅広い子どもと若者の障がいの有無に関わらずに、発達を見守りサポートを行います。また、必要があれば 40 代でも相談に応じています。命に仕切りがなく誰でもたどり着ける人々の居場所となっています。

【療育内容と 5 歳児フォロー】

児童発達支援では主に未就園児の利用で「小集団療育」「個別療育」が行われています。

放課後等デイサービスでは、主に就学後の学齢期の学生を対象に、放課後や夏休みなどの長期休暇中の居場所を提供し支援しています。こちらも「小集団療育」「個別療育」が行われ



小集団療育室（児童発達支援）

ていて、教育委員会所管の少年育成センター子ども支援室、教育支援センターとも連携されています。

5 歳児（年中児）相談では、5 歳の誕生月毎に保護者アンケートを行い、集計と分析が行われています。また、相談希望がある場合は個別相談としてパレット訪問相談が行われ、相談希望がない場合は、4 月にことばの検査を行い各種フォローへつながられています。

【どこの市町村にも需要がある入所施設の充実】

障がい児入所施設として「太陽の家」を再構築・移転するため、現在、隣接した土地に建築・整備中です。生活介護やグループホームなど、子ども・大人・お年寄り・老若男女問わずに居場所がたくさんあります。

【四国中央市の取り組み】

四国中央市の特徴として、障がい福祉施策に対し理解が深い印象を受けました。愛ある条例から始まり、障がい児等支援基金をふるさと納税で創設したり、令和 4 年からは愛媛県がサポート運動の先進地である鳥取県と協定を結ぶ情報を得て、愛媛県および鳥取県担当者と情報共有を図りながら、令和 4 年 7 月より「笑顔の愛サポート運動」を展開しています。この運動を展開していくために「あいサポーター」になる研修に、13 回の養成

研修に約 420 名が参加しています。積極的に市民も含め市全体で取り組む姿勢に人が人を想う温かみを感じました。

【障がい者手帳と発達支援が必要な児童数】

四国中央市の障がい者手帳の所持者数は、令和 5 年 3 月時点で 5,035 人、人口 82,947 人に対する割合は約 6.1%で、市民の約 17 人に 1 人が手帳を所持していることとなります。注目すべきところが小中学生の発達に何かしらの特性を抱えた児童数で、令和 5 年度の四国中央市小学生の児童が 3,517 人、支援学級在籍児童が 151 人、通級指導教室の児童が 144 人、不登校児童は 105 人です。中学校の生徒が 2,013 人、支援学級在籍生徒が 104 人、通級指導室の生徒が 46 人で、不登校生徒は 171 人です。

これを同年の中標津町に変換すると、小学生の児童が約 1,080 人、支援学級在籍児童が 224 人、中学校の生徒が約 600 人中 59 人です。統計によると中標津町は通級指導教室の児童も含めた数字のようです。

人口 8 万人規模の市の小学生約 3,517 人中、支援学級および通級指導教室の登録児童数が 295 人に対して、中標津町は人口 2 万人規模の町で小学生約 1,080 人中、支援学級および通級指導教室の登録児童数が 224 人です。当町の人口割合に対する、発達に何かしら問題を抱えた子どもたちの数はとても多いです。

【町でできることへ繋げる】

本町では同じようにとはいかなくても、できることを 1 つでも 2 つでも取り入れた取り組みをしていかなくてはと考えます。

愛ある条例を市議会の全会一致で可決された条例制定、そして障がい児等支援基金を創設する市民理解が得られた四国中央市の人たちと、本町の違いは何なのか。

障がい児入所施設とまではいかなくても、支援を必要としている子どもたち、大人になった障がいのある方たちが、居心地良く生きて日常を送れる居場所をつくることは責務であると感じました。

愛ある条例がなくても、愛ある町づくりはできる、障がい児等支援基金がなくても、思いやりの心があれば居場所がくれる。町にはなくても町でできることをやるかやらないか、その一人一人の心の在り方、気持ち一つで変えられることはあると思います。

2 視察先 愛媛県四国中央市 四国中央市役所

3 視察日 令和 7 年 5 月 14 日（水）

4 視察事項 ICT 教育について

5 成果（具体的に）

四国中央市では GIGA スクール構想における一人一台端末を活用した学びが始まる前の段階で、すでにクロームブックとエプソンと共同し、印刷できる技術を構築し、プリンタ

ーを使ったクロームブックの使用を導入しています。

スタート時点から国の施策・ただの時代の流れに応じた当町とはレベルも次元も違う世界を歩んで来た四国中央市の ICT 教育から何をどう学ぶのかから戸惑いました。

クロームブックが導入されていないタブレット＝キュビナな当町と、時代の最先端で最新テクノロジーを駆使する四国中央市の子どもたちには、あまりにも大きな ICT 教育の格差を感じました。

ICT 教育を進める中で、「みんなと一緒に体を動かしたい、踊りたい」という車いすの児童の思いを叶えたり、また、ゴーグルをつけて仮想空間の中でみんなと踊ることで、胸から下が動かせない肢体不自由児でも、いっしょに参加することができ、さらに北海道サロマ小学校とオンラインでコラボするなどの教育活動も行われています。

レベルや次元が異なる四国中央市の ICT 教育を目の当たりにし、まずは当町でクロームブックに切り替わるところからがスタートであると感じます。

そして、四国中央市のような先進的な ICT 教育校と本町とがオンラインでつながり、子どものたちが ICT を通した楽しい学びになるような取り組みを実現し、常日頃から端末に触れる環境づくりなど、小さなところからでも始められるように働きかけていきます。

併せて、車いすの子どもたちにも、できないことができる夢のある授業を、みんなと一緒に叶えて行ける環境を作っていきたいと思います。



- 2 視察先 香川県三豊市 バイオマス資源化センターみとよ
- 3 視察日 令和7年5月14日（水）
- 4 視察事項 バイオマス資源化センターみとよについて
- 5 成果（具体的に）

香川県三豊市では燃やさないごみ処理を取り入れていて、ごみは全て資源であり好気性発酵乾燥方式（トンネルコンポスト方式）により、微生物の力で燃やせるごみをエネルギーに再資源化するという日本初の取り組みが行われています。

三豊市は人口約6万人、年間約1万トン出るごみの半分の5,000tがトンネルコンポスト方式のごみ処理によって固形燃料化し、消えた半分はバイオトンネルの中で蒸発しています。なお、三豊市はごみ処理を株式会社エコマスターに委託し民設民営で行われています。

トンネルコンポスト方式は10の過程に分かれており、まずは市民がごみを18種類に分別することからスタートします。驚くことはこれだけの工場をたった4名で運営していること、1tのごみで2万5千円の委託料であること、三豊市のリサイクル率は全国平均20%に対して64%であることです。

今まで視察に訪れた数々の自治体のなかで、このトンネルコンポスト方式が導入された事例はないようで、理由としては1万tのごみを受け入れる場合で、1ヘクタールの土地が必要なためです。また、本施設の立地のように、固形燃料を石炭代わりに使ってくれる製紙会社などが近くにあることも重要です。

本町は雪国で氷点下20度の真冬がある季節の違いを考えると、導入には難しい一面もありますが、説明の中でごみを燃やしているのは日本だけだと聞きました。

脱酸素社会、豊かな自然を大切にする町の取り組みとして、小規模でも燃やさなごみ処理施設、微生物の力でバイオマス資源化を取り入れる、ごみは資源であるという三豊市の取り組みと学びをぜひ参考にしていきたいです。



バイオフィルター上部の木質チップ（下からの臭気がろ過される）

- 2 視察先 兵庫県南あわじ市 松帆北認定こども園
幼老複合型ういずデイサービスセンター
- 3 視察日 令和7年5月15日（木）
- 4 視察事項 松帆北認定こども園（法人概要説明）
ういずデイサービスセンター（施設見学）
- 5 成果（具体的に）

本施設を運営している「社会福祉法人みかり会」は、共生社会の創造を理念に子ども（保育）・障がい者（障がい福祉）・高齢者（介護）の3つが多様に日常的な関わりをすることで、生きがいや喜びを感じながら過ごせる毎日を実現させる環境を構築しています。

共生社会の創造、事業理念の原理がダイバーシティ&インクルージョンです。ダイバーシティ&インクルージョンとは「多種多様な人々が集まる組織や集団において、お互いの考え方や個性の違いを受け入れ、ともに成長していくこと」を示します。共存共栄をめざすことが概念です。

みかり会では障がい者就労支援も行っていますが、共生社会の実現として園へ出向き、

掃除を子どもに教える「清掃班」の人気があるそうです。それは子どもたちに「先生」と呼ばれることに生きがいを感じることで、自信を持って生きる姿につながっています。

認定こども園松帆北では個人の「個」を伸ばしていく保育、発達グレーの子たちにも興味を持ったことを楽しんでもらう、とらわれない保育を行っています。現在 41 名中、3 人ほど障がいを持った発達に特性のある子も一緒に過ごしています。

ういずデイサービスセンターは、2008 年開設当初より、幼児保育と高齢者のデイサービスを一緒にした複合施設として開所しています。

介護理念は「人として尊ばれ、共に生きる空間で心豊かに暮らすこと」で、利用者は男性 2 割、女性 8 割で、女性の利用が圧倒的に多いようです。



スタッフの方は保育士と介護の資格を両方持った方が多く、介護士が 7 名、常勤保育士が 1 名と補助保育士 2 名がいます。6 月からは生後 2 ヶ月の赤ちゃんも利用するとのことでした。

職場環境としては、長く勤めている職員が多く、離職率が低い状況です。最近では子育てをしながら働く若い職員が増えており、案内をしてくれたスタッフのお子さんも施設内にいます。一般的に厳しい仕事とされている介護職ですが、子どもと触れ合えることが、明るく楽しいに繋がり、若い働き手がやりがいを持って働いていると感じました。

この地域では人と人の関わりが 0 歳からずっと続いていきます。子どもが成長しても、スーパーや学校帰りなど、巣立った後も声を掛け合う関係を持っています。昔はどこにでもあった人のつながりが感じられました。

また、介護士（保育士）はタブレットを常に持ち、お年寄りとの触れ合いの一瞬一瞬を逃さずに撮影し、保護者と子どもの成長を喜び合うことができていました。

業務は ICT 化され無駄を省くことで、子どもたちと高齢者の方々への関わりに費やす取り組みが素晴らしいと感じました。

現代社会は共働きの時代となり、核家族で子育てをすることから、育てる親にも育つ子どもにも、お年寄りにとっても、ういずデイサービスセンターのような居場所はとても必要で大切な居場所になります。

多世代の人たちが同じ空間で過ごすことで、一人一人の個性が混じり合い、子どもを優しく見守る高齢者と、いつもそばで温もりと喜びを感じられる子供たち、その幼老共生が叶った居場所があることに、大変感銘を受けました。

少子高齢化は全国的に深刻化していますが、当町にも高齢者と子供たちが共に過ごし、共に関わり、共に笑顔で生きる居場所があるべきだと思います。

人として尊ばれ、共に生きる空間で心豊かに暮らす、共存共栄社会の実現に向けて多くの学びを収穫することができました。